

第21回

第3章 現代を生きる人間の倫理

民主社会の倫理

今回学ぶこと

ヘーゲルの説いた弁証法の考え方を理解して、人間の生き方・あり方について、個人と社会との関係から考える。その際、「人倫^{じんりん}」という、人間集団・人間社会の倫理について、ヘーゲルが考えた家族・市民社会・国家の特徴を学習しながら考える。また、功利主義の思想を理解して、社会の中で生きる人間の幸福について思索を深める。



講師

小林和久

■ ■ 人倫とは ～ヘーゲルの思想～ ■ ■

近代ドイツの哲学者ヘーゲルは、「弁証法」という論理にもとづいて人間の生き方・あり方を考えた。弁証法とは、この世のものは、直接的な肯定の段階である「正」、矛盾を自覚して対立する「反」、この両者を総合した、より高い段階の「合」、という「正—反—合」の運動を繰り返し発展するという論理である。

人間の生き方・あり方について、弁証法的に考えると、人間の行動を外から客観的に制約する「法」があり、自分のあり方を一人一人の心で制約する「道徳」がある。現実の生活では、この両者は矛盾・対立することがあるが、両者を総合したのものとして「人倫」がある。人倫とは、人間社会・人間集団の倫理という意味で、ヘーゲルはこの人倫の中でこそ、人間の自由は現実的に実現されると考えた。

■ ■ 家族・市民社会・国家 ■ ■

ヘーゲルによれば、人倫は「家族—市民社会—国家」として弁証法的にあらわされる。家族は愛情で結ばれた自然の共同体であるが、個人の自覚は弱いままである。家族から子どもが成長すると市民社会の一員となる。この市民社会は、独立した個人の自覚にもとづくが、個々人の欲望の衝突があり、争いが絶えず、人と人との結びつきが弱くなった共同体である。

この両者を総合した、最高の共同体が国家である。国家とは、家族のもつ強い結びつきと、市民社会のもつ個人の独立性という、それぞれの良いところを、ともに生かした

共同体である。ヘーゲルは、人間の真の自由は国家の中でこそ実現され、国家の中で人と人との真の結びつきも回復されると考えた。

■ ■ 最大多数の最大幸福 ～功利主義思想～ ■ ■

近代のイギリスでは、快楽や幸福を生み出すかどうかで行為の善悪を判断する「功利主義」という思想が発展する。その確立者ベンサムは、快楽は単純に量として計算できると考え、「最大多数の最大幸福」というスローガンを説いた。これは、できるだけ多くの人が、できるだけ多くの幸せを得られるように行動しよう、という意味であり、ベンサムはこの考え方に基づいて、人間社会の道徳や法律を作る必要があると考えた。

これに対して、J.S. ミルは、快楽には低級なものと高級なものという質的な差があり、単純に量としては計算できないと考え、高級な精神的快楽を求めるべきだと説いた。それを表したミルの言葉が、「満足した豚であるよりは、不満足な人間であるほうがよく、満足した愚か者であるよりは、不満足なソクラテスであるほうがよい」というものであり、キリスト教の黄金律である「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」という、ナザレのイエスの教えこそ功利主義の理想だと、ミルは考えた。



◇ コラム ◇

近代イギリスを代表する功利主義思想を確立したベンサムとミル……二人の恋愛のエピソードを紹介します。

ベンサムは33歳で貴婦人のキャロライン・フォックに恋をしますが、気持ちを伝えられずに、20年以上経った57歳の時に結婚を申し込みます。しかし、断られてしまい、84年の生涯を終えるまで独身を通したそうです。

一方、ミルは24歳の時、ロンドンの実業家テイラー氏の夫人ハリエット・テイラーに恋心を抱き、相思相愛の仲になったそうですが、「いかなる意味でも、彼女の夫に、ひいては彼女自身に汚点をつけるような行為は一切慎む義務がある」と考えて、純愛を貫いたそうです。そしてミルが43歳の時、夫のテイラー氏が死去すると、その2年後、ようやく二人は結婚します。結婚7年目でハリエットは結核により急死しますが、ミルは、晩年も下院議員になって婦人参政権を主張するなど、女性解放にも尽力していきます。